

早稲田大学 国際教養学部 英語 講評

出題形式	マーク・記述併用
試験時間	Reading : 90分 Writing : 60分
特徴・その他	試験時間が90分から150分に大幅に増えたので、分量は昨年より増加した。ただ、思ったほどの増加ではなく、むしろ昨年までより時間に余裕ができるような分量であった。と言っても、時間が余るようなものではなく、以前はまったく終わらない分量だったものが、うまくいけば終わるかもしれない程度の変更ではあった。全体のレベルは例年と同程度とっていいのではと思われる。Reading は、I と II は設問形式がまったく同じで、パラグラフ要約文の作業をしつつ、内容一致問題や内容不一致問題の選択肢を吟味しなければならない。時間さえあればどうにかなるのだが、どちらも同時に意識しながら読むのはいわゆるマルチタスク能力が要求されると言えよう。IIIの長文読解は早稲田大学理工学部でよく出されるような論理的な思考を問うテーマであった。国際教養学部としては珍しい印象だ。ここで差がつくかもしれない。Writing は、個別に60分の試験時間が設けられた。その分、例年より1つ問題が増えた。ただ、60分あるのなら以前より余裕ができたと言えそう。Iの自由英作文はいわゆるベーシックインカムのは是非を問うもの。昨年の自転車のヘルメット着用の是非と比べると背景知識が必要であった。IIの自由英作文はチャートから読み解ける特徴などを書かせるタイプ。以前に国際教養学部でも出されたことがある。IIIの大意要約問題は、英文自体の分量は減ったが、どこをまとめるかが意外と難しい問題だった。

〔大問別講評〕 Reading

番号	出題内容	コメント	難易度
I	長文問題	<p>昨年のIと比べると分量はやや減ったが、レベルは昨年並みか。下線部の意味を問う問題の狙われている単語と熟語が非常に難しく、類推も難しい。パラグラフ要約文と内容不一致問題の両方の出題が昨年復活し、今年度も継続。読み進めていくのと同時に両方の問題をマルチタスク的に分析する能力が問われよう。そうしないと時間が足りなくなる可能性がある。パラグラフ要約文はまだいいのだが、内容不一致問題は該当箇所を探すのも大変だし、微妙な部分の正誤を判断するのは難しい。一つ例を挙げよう。 <u>Model kits related to the film piled high in the shops, adding to the already gigantic heap of Lego pieces in circulation: 86 for every person on the planet.</u> E <u>Lego is so popular that</u> there are now 86 Lego kits for every person alive today.</p> <p>本文と矛盾のない選択肢のように見えるが、86 kits の kits は pieces にしないといけない。どこまで細かいところに目を配れるかが勝負だ。</p>	やや難
II	長文問題	<p>Iと同じ問題形式の長文読解問題。昨年のIIの問題形式はリード部分の内容不一致問題で、しかもそれぞれ選択肢が5つもある。正解を導くには5×8の40箇所を探さないといけない。それに比べるとこちらのほうが少し楽なので、やや易化と言えようか。下線部の意味を問う問題は、Iと違い、なじみのある単語が多かったであろう。accumulation、rituals、transformation、criticalなどは特に基本単語。trumpは難単語だが、後ろにthat of～「～のそれ」があるということはtrumpは何らかの比較を表す動詞ということになる。何かを手掛かりにする力を身につけることが類推する力になる。内容一致問題は先に選択肢にある印象深い表現を押さえておいてから本文を読み進めるといいだろう。読み進める途中で結構ハッとすることが多い。やってみてほしい。</p>	やや難

番号	出題内容	コメント	難易度
III	長文問題	会話文問題がなくなり、こちらも長文読解問題であった。早稲田大学理工学部で出題されそうなテーマで、文系人間にはとっつきにくい問題だ。論理的な思考が要求される。「『たった一人の司令官のペースで進んでいる小隊』はこの議論の____という比喻と対照的になっている」や But there are not just two times. Times are legion: a 5 one for every point in space.のような設問が数多くある。とにかく抽象的な内容で何を言っているかわかりにくいし、設問も非常に抽象度の高い内容となっている。今年度で差がつくのはここではないかと思われる。理工学部の問題はさらに難しいので何とも言えないが、この大問に匹敵するレベルは理工学部くらいしかないだろう。	難

〔大問別講評〕 Writing

番号	出題内容	コメント	難易度
I	自由英作文問題	例年社会性のあるテーマが出題されるが、今年度は universal basic income「最低所得保障」がテーマ。国立大学の自由英作文問題でも出題されたことがあるテーマだ。年によって a paragraph と書かれていたり書かれていなかったりするが、今年度は a paragraph と書かれている。どちらなのかしっかり押さえるようにしよう。さらに appropriate [specific] reasons and examples と書かれていることが多いが、今年度は appropriate reasons となっていた。当然複数の理由を書かないといけない。字数制限はないが、あまり多く書く余裕はないし、条件にないのだからたくさん書く必要はない。いかに短く簡潔に書けるかが勝負だ。	標準
II	自由英作文問題	チャートを見てどんな傾向や情報をくみ取れるかを英語で答えさせる問題。従来の国際教養学部でも出題されたことがある問題形式。世界の平均寿命とその内訳としての国家の平均寿命の推移を表したグラフが掲載されている。特別な知識は必要ないだろうが、重要な社会問題であることには変わらない。what trends と複数形になっているので、こちらも少なくとも2つの傾向は書くようにしないとイケない。first や second のような語を使って2つの傾向を挙げていることを示したほうが、採点者にはわかりやすいと言えるだろう。答案用紙は採点者へのラブレターだという比喻表現は有名だ。	標準
III	大意要約問題	日本語による大意要約で、字数の指定はない。今年度はギリシャと中国の人びととそれぞれの哲学が対比的に扱われた文章。ちなみに、去年はワクチン接種がいくつかの要因で減少気味になっていて、それは集団免疫という観点から問題があるという趣旨の英文であった。このコロナ禍においてタイムリーなテーマであった。国際教養学部の問題は、早稲田大学の文学部や文化構想学部の英語による要約問題とは違い、一つの段落で構成されていないことが多いことを押さえる。今年度も2段落で構成されている。もう一つは、要約問題とはいえ、文学部や文化構想学部のそれとは違い、ピンポイントのまとめ方ではなく、ある程度の部分を盛り込むような要約文にするのが国際教養学部の特徴だ。今年度はギリシャ社会⇔中国社会、ギリシャ哲学⇔中国哲学の2つの要素の対比を意識できるかがポイントであろう。	やや難